



目には青葉 山ほととぎす

初がつほ
やまぐちそどう
(山口素堂)

目にも鮮やかな青葉が、耳には美しい声で鳴いているホトトギスが、そして口にはおいしい初ガツオ。

春を一杯に浴びながら、季節の味をいただいている喜びが伝わってきます。

初夏の季語として一般には「新緑」をいいますが、みずみずしい若葉をつけた木々を「新樹」と言います。特に、街路樹の木の姿を表現する場合にこの言葉を使います。

4月、卯月うづき。心洗われるような青葉若葉、匂い立つ新鮮な緑が一番ですが、今年「新緑」「新樹」の風情が違っていているように感じています。コロナ禍で指宿の街の様相が変わっているからでしょうか。

「新緑が 山を染め 人を染め」

木々の生気を感じながら、新年度がスタートしました。卒業、転勤、涙の別れ。3

月が「ウルウル」の季節とすれば、4月は「ウロウロ」の季節とも言えます。初めての職場、学校、体験にウロウロ戸惑う人が多いからです。遠くの人々は、新芽をつけた樹木が空いっぱい枝を伸ばしています。

新しい光。新しい風。そして職場や学校に加わった新しい顔。

4月は出会いの季節です。社会の荒波に挑む若者たちは、今「新しい海」へこぎ出そうとしています。

新しいものに、がむしやらに向かっているのは若さの特権です。社会人の仲間入りをしたばかり、期待と不安が同居しての出航の時です。

作家・山口瞳やまぐちひとしさんは、毎年4月1日に新社会人にはなむけの言葉を贈っていました。「社会こそ本当に身につく学

問の場なのである」「踏み込め、踏み込め、失敗を怖れるな!」「新人諸君!この人生、大変なんだ」:と。

無頼の血が流れる一つひとつの言葉が胸に響きます。

縮こまっていたは何もできません。「思い切り未来に羽ばたけ。負けるな若者たち!」皆でエールを送りたいものです。

「なせば成る なさねば成らぬ 何事も ならぬは人のなさぬなりけり」。江戸時代、財政危機の米沢藩をよみがえらせた上杉鷹山うえすぎやとうざんの歌です。

いつの時代も「なせば成る」との強い意志を持つことから春は始まります。



指宿市長
豊留悦男
とよどめ えつお